「日々の理科」（第 1811 号）　2019,-6,24

「虹ではない虹（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

日暈（にちうん）は、高層大気の状態が不安定で、巻層雲や巻積雲などの、上層雲が出やすい時期によく観測される。日暈だけが単独で出現することはむしろ稀で、大抵は他の大気光学現象を伴って出現する。

しかしどうしたわけか、この日の日暈は、完全に単独で出現した「純日暈」だった。大気光学現象は、太陽高度が重要である。この日は夏至が近く、正午過ぎに日暈が見えたので、太陽高度が高すぎたのだろう。

たとえばこれは、太陽の左側に現れた「幻日」という現象だ。正確には日暈の一部（太陽と水平な位置）が、より明るく見える現象である。よく見ると、幻日の左側に横筋（幻日環という）の一部も見える。

日暈は、太陽本体（光球）を、何かの地上物で遮光したほうが良い。これは肉眼で観察する場合も、写真撮影する場合も同様だ。しかしこの日の日暈は、ほぼ天頂（頭上）に出現したので、それも困難だった。

太陽が地平線近くにある時に、日暈が現れると、写真のように、さまざまな大気光学現象を伴うこともある。さしずめ、「大気光学現象の博覧会」といったところだろう。

内暈と幻日は、それほど珍しいものではない。しかし、この写真のバリーアークやタンジェントアークは珍しく、私も数回しか目にしたことがない。これからの時期も、空に気を付けて観察してみたい。